ペルソナのなく頃に

深浪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ペルソナのなく頃に

【Ｎコード】
Ｎ２６７４Ｈ

【作者名】
深浪

【あらすじ】
乗り越えた惨劇。断ち切った悲劇の連鎖。最高の仲間達。だけど、離別の時はやって来て。そうして新たな輪廻が廻り出す…。そう、ペルソナのなく頃に――。

００．プロローグ（前書き）

この話はＰＥＲＳＯＮＡ３とひぐらしのなく頃にのコラボ小説です。
Ｐ３原作沿い＋オリジ設定満載で進んでいく予定であります。その為ひぐらし世界も昭和設定ではありません。
また、ひぐらしはＰＳ２祭の澪尽し編の後日談っぽいです。
つまり圭一×魅音です。この二人がメインな予定。
Ｐ３は僕の好みで主人公×ゆかりが熱いです。
ちなみに魅音は高二で圭ちゃんは高一です。
…とまぁ色々問題？はありまくりですがお楽しみくださいっ！

00．プロローグ

乗り越えた惨劇。

断ち切った悲劇の連鎖。

最高の仲間達。

だけど、

離別の時はやって来て。

――そうして新たな輪廻が廻り出す…。

門出の日が、やって来た。

「圭一、レナ、卒業おめでとうなのですよ～☆」

「「ありがとう、梨花ちゃん！」」

「おーほっほほ！！私の朝のトラップコンボから解放されて良かったですわね圭一さん！」

「なんて言いつつも沙都子は昨日圭一と離れるのが寂しい、と涙目だったのですよ。」

「り、梨花ぁ！！」

「な、泣いてる沙都子ちゃんかぁいい…おもちかえりぃ！！」

――こんな光景も、しばらくは見れなくなるんだな。

「圭ちゃん、そんなしみじみと物思いに耽ってないでレナさんどうにかしてくださいよ。」

「むぅ…かぁいいモードのレナを止められるのは圭一くらいしかいないからね。」

「詩音と悟史にそう言われちゃあレナを止めなきゃ口先の魔術師の名が廃るな！」

俺達はずっと一緒だと思ってた。

あの日――鷹野さんの陰謀を打ち破って、梨花ちゃんに長年連れ添った友の羽入が消えてしまって…。悟史が帰ってきて。

ずっと続く筈なんてなかったのに。

魅音、詩音、悟史の卒業だ。詩音と悟史は興宮の高校に通うことになったが…。

「け、圭ちゃん…！私、都会の高校受かっちゃったよ！」

「マジかっ！？良かったじゃねーか！」

――魅音。

そう、魅音は東京よりかは少しだけ雛見沢に近い”港区”の”私立月光館学園”という学校に合格したのだ。

そして、一年前魅音は雛見沢を出た。

「魅ぃちゃんのこと思い出してたのかな、かな？」

「れ、レナ…。」

「大丈夫、圭一くんはもうすぐ会えるでしょ？」

「…そうだよな。」

傍から居なくなってしまってから、魅音が俺の”特別”だったことに気がついたんだ。馬鹿だな…俺。

――だから、追いかけることにしたんだけどな。

「レナは詩音達と同じ興宮の高校だよな。」

「うん。オヤシロ様の祟りとか関係なしで、レナの居場所はやっぱり雛見沢だから…。」

「レナ…。」

「私たちみんな…離れてたって心は繋がってるよね？よね？」

「当たり前だろ！俺達は最高の仲間だからな！」

――そして次の日。

俺はみんなが見送る中、雛見沢を後にした…。

新たな出会いと、魅音のいる港区へ――。

今思えば、魅音が月光館学園に通うことになった時点で俺達が”影時間”を巡る戦いに関わることは決まっていたことだったのかもしれない。

そう、ペルソナのなく頃に――。

００．プロローグ（後書き）

圭ちゃんが雛見沢出発までをプロローグにしました。

次回魅音登場の予定。

Ｐ３メンバーは・出ますように←ちょ

01．サイカイ（前書き）

ひたすら圭魅になった第一話です…。

ではお楽しみください。

01．サイカイ

――会いたかったって言ってもいいかな。

綿流しに一度帰ってきて、それ以来。正月に思い詰めたような声で「帰れない」と言ってきた魅音。

「あん時だよな…」

俺が魅音と同じ学校に行こうとちゃんと決意したのは。

「ちゃんと話せるよな…？」

魅音は港区ポートアイランド駅まで迎えに来てくれるらしい。

「…服とかおかしくないよな？」

――そして、ポートアイランド。

「圭ちゃん！久しぶり、元気だった！？」

「魅音！あ、会い…」

駄目だ、言えねぇ！

「あ、相変わらず元気そうだな！」

「私を誰だと思ってんのー？天下御免の園崎魅音だよ？」

「それもそーか！」

これでいい。俺達はやっぱこういうのがいいんだろ…？

「あ、荷物は男子寮に送られてるハズだから…。圭ちゃん？」

いや、でもなんか大人っぽくなったような気も…。

「圭ちゃん！どーしたのさボーッとしちゃって。まさか久々のおじさんの美貌に惚れた？」

「ば、ばっかやろ…んな訳…っ」

「え、冗談だったんだけど…圭ちゃん、顔真っ赤…」

「あー！み、魅音。俺無性に喉が乾いたな！」

「そ、そうだね！長旅で疲れたよね？ちょっと歩くけど近くにモールがあるから。」

――ポロニアンモール内、ジャガール。

「ほんと…久しぶりだよな。」

「うん…。ごめんね、なかなかみんなに連絡できなくて…。」

「今年の綿流しも帰れるだろ？」

「多分、ね。」

歯切れが悪いな…。魅音だったら無理矢理にでも帰る時間を作りそうなものだけど。

「圭ちゃん…私さ…」

「…どうした？」

思い詰めたような表情。

あの電話の時と同じような声。

「や、やっぱ何でもない。」

「…魅音。無理には聞かないが、なんか悩みがあるなら相談しろよ？俺達仲間だろ？」

「うん…。あ、もうこんな時間か。じゃあ男子寮に案内するから、行こっか？」

「ああ。」

魅音が雛見沢から離れた一年間に、何かあったのだろうか…？

――男子寮前。

「あ：魅音！俺携帯買ったんだけど、アドレス教えてくれねーか？持ってるだろ？」

「…うん！じゃあ、また明日迎えに来るよ。学校まで案内するから。」

「ああ、悪いな。」

「じゃあ…」

魅音の去ってゆく方向は女子寮ではなかった。

「魅音、女子寮は隣の棟だろ？」

「あ、私は…ちょっと離れた寮に住んでるから。」

「そうなのか…。」

「じゃあまた明日ね！」

魅音は笑顔で手を降り去っていった。

携帯のディスプレイの”園崎魅音”を見つめる。

「…っしゃあ！！」

「圭ちゃんちょっと大人っぽくなったな…。背も高くなってたし。」

同じ学校に通ってくれることは勿論嬉しい。だけど、嫌な予感もしていた。

「あ、おかえり魅音。」

「ただいま、ゆかり。」

出迎えてくれたのはこの巖戸台分寮の寮生で同学年の女の子、岳羽ゆかり。

「そうだ…桐条先輩が帰ってきたら作戦室に来てくれって言ってたよ。」

「美鶴さんが？何だろ？」

私は作戦室に向かう。…どうか、嫌な予感が当たらないように。

「失礼しまーす。どしたの美鶴さん？アキ先輩まで。」

桐条美鶴、真田明彦の両名がそこにいた。

「魅音、聞いてもらいたいことがある。」

「その様子だと私達付き合うことになりましたって感じじゃないよね…。」

「――新たな適正者が二人見つかった。」

嫌だ…聞きたくない。もし当たっていたら…。

「一人目は前原圭一。君の後輩だったらしいな…。」

「っ…圭ちゃんが…？」

嫌な予感は、当たってしまった。

その後の美鶴さんの話は頭に入って来ない。

この戦いに、圭ちゃんが巻き込まれるの…？

「…園崎？」

「断固反対です…！圭ちゃんを巻き込むなんて…っ」

「私達には、力が必要なんだ。」

――分かってる。美鶴さんだって望んでやってる訳じゃないってことくらい。

「圭ちゃんに…この寮に入ってもらうんだよね。」

「明日にでもそうしてもらおうかと思っている。彼には理事長から説明があるだろう。」

「事実は隠して…？」

「ああ、暫くはな。」

圭ちゃん、頭良いから絶対不審がるよ…。それに圭ちゃんに嘘つくなんて、嫌。

「…どんな形になろうと、私は圭ちゃんを守る。私にとってそれはこの部の活動より大切なことだから。」

「魅音…。」

「――じゃあ、失礼します。」

圭ちゃんのことだから、一緒に戦うって言ってくれるんだろうね。だけど…。

「…嫌だよ。圭ちゃんが傷つくかもしれないなんて…っ」

それが私のエゴだとしても。

嗚呼、また繰り返されるこの一年。

――随分時間がかかったな。モノレールの脱輪事故に巻き込まれるとはついてない…。

「これも、いつも通りか。」

此処は十年前――僕が全てを失くした場所。何度となくこの道を通った。

「もう0時か…。」

僕の目の前で景色は一変する。

止まってしまった音楽プレーヤーを始めとする機械、赤い血溜まり、淀んだ緑色の空、棺のようなオブジェ。

「…影時間。」

慣れたものだよ。

「巖戸台分寮…。」

相変わらず、ここは変わらないな。

そして僕は扉を開けた――。

『やぁ、湊君。』

「…綾時。いや、まだファルロスか。」

『署名は…もういいね。もう何回もしてるから。』

「ああ…。諦めてしまおうかって何度も考えたよ。だけど…」

そうするとみんなを思い出してしまって。特に”彼女”を。

『この世界は――随分イレギュラーみたいだ。』

「え…？」

『君の知らない人間がこの寮にいる。』

「…それが賽子の６の目になればいいけどな。」

『――じゃあ、始めるよ。』

ファルロスの姿は見えなくなった。

「誰っ！？」

岳羽…。

いっそのこと、記憶がリセットされればいいのに。

僕が覚えてることを、岳羽は覚えていないから。

いつも通り彼女がホルスターから召喚器を取り出したその時――。

「待て岳羽！」

「ちょ、ストップゆかり！」

一つは聞き覚えのある先輩の声。もう一つは――成程、これがイレギュラーか。

俺は見覚えのない翡翠の髪の少女を見つめた――。

01．サイカイ（後書き）

Ｐ３メンバーも何とか出せました！

湊が何を言っているかは…ひぐらしファンの方なら分かってもらえるでしょうか？汗

果たして次回主ゆかモードに突入するのでしょうか！？

近い内に更新出来るよう頑張ります。では。

０２．新入生（前書き）

やっぱり圭魅です。ひたすら圭魅です。

ひぐらしメンバーを出したいこの頃。

02．新入生

――夢をみた。不思議な場所だ。足元は血まみれで、空は暗い緑色。そして馬鹿デカイ月。そして、魅音がいた。

「…おい魅音。なにしてんだよ？」

魅音は応えない。そして魅音は泣いているようにも見えた。

「圭ちゃん…逃げて！」

「え！？」

魅音の身体から血が流れた。

「魅音…！！」

嫌だ、失いたくない。

『助けたいか？』

ああ、助けたいさ。

『――力を求めろ。』

…力？

『我は汝、汝は我――』

そしてそいつは俺を飲み込もうと――！！

「っ！！」

俺は飛び起きた。…目覚ましがなる前に起きちまったぜ。

「魅音…。夢で、良かった…。」

これで待ち合わせに遅刻する心配もなくなったわけだが。

「今日から高校生か…。」

――そして、俺にはある難題が待ち構えていた。

「圭ちゃんおっはよー！」

「おっす、魅音！」

「なんか目赤くない？…深夜番組でも見てたのかなぁ？」

「ち、違ぇよ。変な夢見ちまって…。」

「夢？」

「お前が――いや、何でもない。」

「き、気になるじゃん！」

「あーもういいだろ？じゃあ魅音に悩殺される夢をみた。これでいいか？」

「嘘だ！！」

…それはレナの十八番だ。

「にしても・・緊張してきやがった。」

「スピーチのこと？口先の魔術師の圭ちゃんなら大丈夫だって！」

その難題…俺はなんと新入生代表でスピーチをしなければならなくなっていた。

くそ、首席で入学するもんじゃねーな。

…まぁ分かってたけどよ。魅音に会えることで頭が一杯で・・ちょっと忘れてたんだけど。

「ちゃんと考えてはいるんでしょ？」

「まぁな…。お、あれが月光館学園か？やっぱでっけーな！」

「初等部から高等部まであるからね！おじさんも入学したばっかの頃は迷子になったもんだよー。」

高等部の校門が見えてきた。

「ん？あれは――ゆかり！湊君！」

魅音が声をかけた先にいたのはピンクのカーディガンを着た女の子と、青い髪でキタローヘアーの男だった。

「あ、魅音！」

「園崎さん。」

「かったいなー、魅音でいいって！」

会話から察するにこの二人は魅音と同級生らしい。

「魅音、彼は？」

「あ、私の後輩っていうか仲間というか…。」

「前原圭一です。今日からここの一年なんで‥よろしくお願いします。」

初対面だしな。礼儀正しくきめておく。

「前原圭一君か…。私は岳羽ゆかり。よろしくね！」

「僕は有里湊。よろしく。」

なんか有里さんって…誰かに似てるよーな…。

「なんとなく悟史に似てない？」

「あ、悟史か。って心を読むなよ魅音。」

「…圭ちゃん、また口に出てたよ？」

「え」

この癖いい加減どうにかしねーとな…。いや、悟史じゃなくて…雰囲気が誰かに似てる。

「じゃあ圭ちゃん、私達はここで。」

「おう、じゃあな。」

どうやら三人は偶然にも同じクラスになったらしい。

「あ…のさ、圭ちゃん。放課後一緒に行って欲しいところがあるんだけど。」

「…デートか？」

「ち、違う違う！圭ちゃんに会いたがってる人がいるんだよ！」

「俺に？」

デートじゃないのかと内心ガッカリしたけど、俺に会いたがってる奴…？

「…それはまた後でね。とりあえず今はスピーチがんばりなよ！」

「お、おう！」

ばしんと俺の背中を叩き魅音は去っていった。

――講堂。

「えー、それでは新入生代表、前原圭一君。」

「はい。」

圭ちゃん…ファイト！

「彼、新入生代表なんだ？」

隣の席のゆかりが話しかけてきた。

「まぁね。首席で入学しちゃうんだもん。」

「すっご！あ、スピーチ始まってるよ。」

「――春の陽射しが気持ち良いこの季節、僕達は期待や希望を胸に入学します。しかし楽しいことばかりではなく、時には困難に挫けそうになることもあるでしょう。ですが、一人で思い悩まず仲間に助けを求めることも一つの勇気だと僕は考えます。私情ではありますが、かつて僕や僕の大切な人達も惨劇に打ちのめされそうになりました。そんな時僕を導いてくれたのは大切な人達との絆でした…。高校生活を迎える上で、今まで出逢った人達との時間を忘れず、そして新たな出会いの中で沢山の絆を作れたらいいと思います。――

新入生代表、前原圭一。」

拍手が鳴り響く。

絆…か。圭ちゃんらしいや。

あの惨劇を乗り越えられたのは…みんなの絆の力だもんね。

ならきっと――特別課外活動部に待っているであろう戦いだって、力を合わせれば大丈夫な筈だ。

「…ありがと、圭ちゃん。」

心のどこかで不安だったシャドウとの戦い。…圭ちゃんに戦ってもらうのは賛成できないけどさ、側に来てくれただけで…私は――大丈夫なんだって思えるよ。

「…魅音？」

「へ？どしたのゆかり。」

「顔、すっごく緩んでるけど。」

「え」

…あーもう、ばればれじゃんよ私。

――放課後。俺が教室を出ようとすると…。

「圭ちゃん。」

「魅音、迎えに来てくれたのか？」

「圭ちゃんのことだから待ち合わせしたって道に迷うだろうと思ってね！」

そこで俺は周囲の視線に気づく。…ああ、成程。魅音はやっぱどこでも人気者なんだよな。

――小さな嫉妬心だってことくらい分かってる。

「魅音、行こーぜ。連れてってくれるんだろ？」

「うん！」

魅音が無自覚なのが難点でもあり利点だ。…俺って結構計算高いかも。

――魅音に案内され辿り着いたのは…。

「理事長室？」

「ここの理事長が…圭ちゃんに会いたがってるんだ。」

魅音の顔が心なしか曇っているように見えた。

「理事長、園崎です。圭ちゃん…いや、前原圭一君を連れてきました。」

中からどうぞ、と声が聞こえた。俺達は中に入る。

「やぁ、よく来てくれたね。僕は理事長の幾月修司。」

「…どうも。」

なんか、この人苦手かもしれない。本能的にそう感じた。…魅音も表情を見るに同じらしい。

「それで俺に何か…？」

「実は、君に”巌戸台分寮”に入寮してもらいたいんだ。」

巌戸台分寮…？

「私と朝会ったゆかりと湊君、他にもいるけど…とりあえず私達がいる寮だよ。」

「…男女混合なんですか。普通あり得ないですよね。」

「特待生の寮だからね。あまり関係ないんだよ。」

…一見おかしいところはない。

「魅音。お前も特待生なのか？」

「え…えっと…っ」

「――園崎君は旧家、園崎家の次期当主だからね。」

…嘘だな。

魅音がそんな理由で特待生の寮に入るなんてあり得ない。何か他に理由がある筈だ…。

「それで、メリットは？俺がその寮に入るこで何らかのメリットがあるんじゃないのか？」

「っ…」

その言葉に反応したのは魅音だった。最近元気がないことがあったのはこれが原因なのか？

「――君も察しがいいね。そこにいる彼女も一年前同じことを僕に言ったよ。確かにメリットはある。」

「り、理事長！」

「いいよ魅音。聞かせてくれ。」

「君は…緑色の空に見覚えがあるかな？」

「！？」

今日みた夢だ。

「その様子だとあるみたいだね。このままだと僕らのメリット以前に君自身が危険なんだ。」

「…化け物に襲われるとかそんな感じですか？」

「そんなところだ。」

…選択の余地はなし、か。

「分かりました。今日からでも移らせてもらいますよ」
「理解が早くて助かるよ。荷物は今日中に送ろう。」
俺は魅音の手を引き理事長室を後にした。
「け、圭ちゃん…。怒ってる…？」
「何でだ？」
「何も言わないで理事長に会わせたこと…。」
「別に怒っちゃいねーよ。魅音が俺の為にしてくれて間違ってたこと、今までないからな。でも、そのせいで魅音が傷つくかもしれないなら――俺にはそっちの方が痛えよ。」
「圭ちゃん…。」
「また今度話してくれればいいから。」
「…ありがと。それとさ、緑色の空って…。」
「――夢でみた。緑色の暗い空、赤い血溜まり。馬鹿デカイ月。」
「…そっか。やっぱそうなんだ。」
「魅音…？」

「何でもない…。圭ちゃん。」

「？」

「圭ちゃんは私が守るから。私が傷つくことになったとしても…。」

「魅音…」

――そう、そして満月は近づいてくる。

０２．新入生（後書き）

入学式の一日だけで終わってしまった（汗）

そして順平を出せなかったｏｒｚ

次で満月イベントいくかな？

０３．覚醒（前書き）

だいぶ間があいちゃいました（汗）

ひぐらしメンバーが出てくるのはけっこー後になりそうだな・・。

03．覚醒

――４月９日、影時間。

（ゆかりｓｉｄｅ）

「彼――前原圭一と有里湊の様子は？」

桐条先輩の言葉で、私はモニターに目を向けた。

「異常は、ありません。」

桐条先輩はよく普通にできるな…。監視なんて。幾月さんは偶然にもいないらしく監視は私達二人が行っていた。…普通真田先輩がやるべきなんだろうけど、真田先輩と魅音は外回りに行っていた。

真田先輩はいつものことだけど魅音は違う。監視には参加したくないと言い、真田先輩についていっていったのだ。

というかコレ、私がここに来たときもやられてたりして…。あ、怖いから考えるのやめとこ。

「岳羽？顔色がよくないようだが…。」

「い、いえ！大丈夫です。でも…なんかこれじゃモルモットみたい。」

「私達には――力が必要なんだ。」

「それは分かってますけど…」

嫌だった。どうしようもなく嫌だった。あの時も――

「え…？」

”あの時”っていつ？監視カメラで監視なんて生まれてこの方やったことあるわけないのに。

「っ…！？」

なに…これ？頭が、痛い。

「岳羽？おい、どうした岳羽！」

「っ…頭が……！！」

何かが流れ込んで来そうな不思議な感覚。やめて、嫌だよ、どうして”彼”は――！！

「岳羽！」

桐条先輩の鋭い声に思考がストップした。

「っ…すいません。」

「大丈夫か？」

「私は…大丈夫です。」

「…無理はするな。」

さっきまで何を考えていたのか思い出せない…。

「疲れてんのかな…。」

そう思った時、魅音から連絡が来た。

（魅音ｓｉｄｅ）

「…アキ先輩。」

「何だ？園崎。」

「監視って私の時もしてたの？」

アキ先輩は気まずそうに

「ああ…」と答えた。

「俺と理事長は参加していない。美鶴だけだ。岳羽の時は――お前には伝えていなかったようだが。」

「そっか…。」

…見られてなきゃいいけど。鬼の――刺青。”魅音”である証でもあり、”詩音”でない証。

「園崎、そろそろ影時間になるぞ。」

「…りょーかい。」

何度通り抜けても慣れない。この感覚。影時間だ。

「やけに月が綺麗だね…。」

怖いくらい美しい満月。

「…血でも騒ぐのか？」

――アキ先輩は私を何だと思ってんのさ…。

そう言い返そうとしたその時だった。

「伏せろ園崎！」

「！！」

とてつもなく大きな爆音が響いた。私は辛うじて攻撃をかわす。

「シャドウ！？って…デカすぎ！おじさん笑えないわー！…ってアキ先輩！？」

「っ…！！しくじったな。」

アキ先輩は脇腹を押さえていた。…肋骨か？

「…美鶴さんに連絡しないと！」

私は通信機を取り出した。

「美鶴さん！」

『どうした二人とも、何かあったのか？』

「馬鹿デカいシャドウに襲われてアキ先輩が負傷してる！」

『何！？…仕方ない、帰還してくれ。私達は襲撃に備える！』

「了解っ！」

寮にはみんなや圭ちゃんがいる…。出来れば食い止めたかった。

「アキ先輩、戻ろう！」

「チッ…仕方ない。」

私達はどうにか攻撃をかわしながら走る。

「園崎、後ろだ！」

真後ろからの攻撃をかわすのは、キツイ。

私は召喚器を構えた。

「力を貸して――アベル！」

私のペルソナ。兄のカインに殺されてしまう、アベル。――よりによって私がこのペルソナを使うなんてね…。

「ソニックパンチ！」

攻撃は食い止めたが相手には全然ダメージを与えられていないらしい。

「うっそ…！！」

「チッ！急ぐぞ！」

やっと寮の扉が見えてきた。私達は飛び込むように中へ入った。

「明彦、魅音！」

美鶴さんたちが駆け寄ってきた瞬間、アキ先輩が崩れ落ちた。

「真田先輩！？」

「っ…大丈夫だ。それよりとんでもないのが出たぞ。」

「あんなシャドウ初めてみたよ…。」

正直、全員でやって勝てるかどうかも危うい。こんな時部活メンバーがいてくれたら――

「魅音？」

え、この声…。

「圭ちゃん！？」

（圭一ｓｉｄｅ）

「外：やけにうるさいな…。って今の爆発音か！？」

見に行ったほうがいいかもしれない。護身用の為雛見沢を出るときに悟史からもらった金属バットを構えラウンジに向かうと、有里さ

ん以外の寮生が集まっていた。

「魅音？」

「圭ちゃん！？」

「なんか外で爆発音みたいな音がしたから見に来たんだけど…。」

というか今気づいたのだが明らかに外の様子は前に夢で見た緑色の空だった。

「…これは何の騒ぎですか？」

凛とした声がラウンジに響いた。

「あ、有里君！？」

「うるさいんで起きてしまいましたよ。…何かあったんですね。」

有里さんの問いに桐条先輩が答えた。

「前原、有里。落ち着いて聞いてくれ。この寮は今狙われている。」

「え！？」

「……」

有里さん――全然動じてないな。詩音もびっくりなポーカーフェイスだぜ。

「大丈夫だ、君たちのことは必ず守る。岳羽、裏口から彼等を逃がしてやってくれ。」

「…裏口からは無理そうですよ。ホラ。」

有里さんが裏口を指差す。ドン！ドン！と何かが扉を破ろうと叩いているような音だった。

「ちなみに僕が降りてくる前に屋上からも似たような音がしてました。」

「美鶴、寮内に安全な場所は無いようだ…。外に出て隙を見て逃がすしかないんじゃないか。」

「ちょ、真田先輩、そんなの危険すぎませんか！？」

「仕方ないだろう！どう思う、美鶴。」

「――どのみち危険な事に変わりはない。外に出るぞ！」

…状況が飲み込めない。

「あのね、圭ちゃん。今外からこの寮はシャドウ――化け物に狙われてるんだ。私達が食い止めるから圭ちゃんたちは逃げて、ね？」

「なっ！！お前を置いて逃げれる訳ないだろ！？」

「いいから！」

「時間が無い！行くぞ！」

全員寮を出た。その瞬間鋭い斬撃が向かってくる。

「みんな伏せろ！」

桐条先輩のその言葉が無ければ俺の首は飛んでいただろう…。

「きりがないな…！！」

魅音、桐条先輩、真田先輩が拳銃のようなものを取り出し、なんと自分のこめかみに当てた。

「な、何してんだよ！？」

「――大丈夫だから。」

魅音がそう呟く。

「アベル！」

「ペンテシレア！」

「ポリデュークス！」

――場違いにもその異形の存在を綺麗だと思ってしまった。一瞬化け物が怯む。

「岳羽！二人を連れて逃げろ！」

「わ、分かりました！二人ともついてきて――」

岳羽先輩は最後まで言うことなく吹き飛ばされてしまった。

「っ…岳羽！！大丈夫！？」

有里さんが駆け寄る。

「痛っ…なんとか大丈夫…かな…」

「よかった…。」

心からホッとしたような笑みを浮かべていた。

「やばい…足、挫いたっぽい。」

岳羽先輩が真っ青な表情で呟いた。それ、かなりやばくないか？

そんなときでも容赦なく攻撃が襲いかかってきた。

「圭ちゃん、逃げて！」

「！？」

魅音が俺を突飛ばす。倒れて動かない魅音。血？誰の？魅音の――？

「あ‥あ‥うぁぁぁぁ！！」

殺す殺す殺してやる俺の仲間を魅音を傷つける奴は誰であろうと許

さないゆるさないユルサナイ――！！！

足元に魅音の落としたらしい拳銃のようなものがあった。

「…君に出来る？」

その問いは誰だろう？有里さんかな。俺はこめかみに銃口を向けた。

「ペ　ル　ソ　ナ」

――引金を引いた。そして俺から現れた異形の存在。

『我は汝、汝は我。我は汝の心の海より出でし者、ペルセウスなり――。』

そう言うとペルセウスは刀で化け物に斬りかかった。皆その光景を見ていた…。

「うっ…圭ちゃん…？召喚、したの！？」

よかった。魅音…無事だったか。

――そう確認した瞬間、俺の意識は途切れた。倒れたとき誰かが受け止めてくれたような気がしたけれど…分からなかった。

（湊ｓｉｄｅ）

シャドウをあらかた片付け前原圭一は倒れた。地面に着く前に受け止める。

「…初めてだな、こんなの。」

この日に理事長がいないのも、みんなで寮から逃げ出す状況に陥ったことも、僕以外の誰かが満月シャドウを倒したのも、タナトスが暴走しなかったのも――。僕がデスを宿していることは理事長がいない今気づかれていない…。これはチャンスかもしれない。

「湊君！圭ちゃんは無事なの！？」

「大丈夫だよ園崎さん。気絶してるだけみたいだ。」

そしてこの少女、園崎魅音…。かなりペルソナ能力を使いこなしているように見えた。

「四人とも大丈夫か！？」

真田先輩と桐条先輩が駆け寄ってきた。どうやら残りのシャドウは先輩達が倒したらしい。

――前原圭一と園崎魅音が何かしらのイレギュラーになっているのは間違いないだろうな…。

影時間が明け、真田先輩と前原圭一と流血していた園崎魅音を病院に搬送し一段落ついたところで岳羽に声をかけられた。

「有里君！その、さっきはありがとね…。転んだ時駆けつけてくれて。」

「…別に大したことじゃないよ。」

あの時は一瞬我を失いかけたけど。

「でも、ありがとう。――じゃあ今日はゆっくり休んでね。おやすみ。」

「うん、おやすみ岳羽さん。」

僕は自室に戻った。

「…さっきは岳羽って呼んでくれたのにな…。」

そんな彼女の呟きを知るわけもなく。

０３．覚醒（後書き）

圭一覚醒編でした。初召喚は魅音の召喚器で、と決めていたので。

ほんのり主ゆか要素も入れられたかな？

湊の代わりに圭ちゃんが入院っぽい…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2674h/

ペルソナのなく頃に

2010年10月8日23時44分発行